

研究主題

「学習した表現を用いて、自分の気持ちや考えを外国語で伝えることができる児童の育成 —教員が児童と学習状況を共有し、児童の話す力を伸ばす個に応じた指導の工夫—」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
中野区立江古田小学校 主任教諭 黒川 晃文

第1 研究のねらい

グローバル化が急速に進展する中、グローバル社会で活躍する人材育成に向けて、「令和4年版子供・若者白書」（令和4年6月内閣府）では、外国語によるコミュニケーション能力はこれまでのように一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要であり、その能力の向上が課題として示されている。そのため、外国語によるコミュニケーション能力を育成することは喫緊の教育課題であり、小学校外国語科においてもコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成を行っている。

小学校外国語科における児童の実態について、都内公立小学校の第6学年の児童及び教員に調査を行った。第6学年の児童を対象に行った調査結果では、「自分の気持ちや考えを英語で伝えられるようになりたい。」と思いつつも「話したい内容があっても、英語で伝えられない。」と回答した児童の割合は全体の約78%であった。また、外国語科の指導経験がある教員を対象に行った調査結果から、調査に回答した全ての教員が話す力において児童間の学習定着度に個人差があると感じていることが明らかとなった。

これらの結果から、小学校外国語科において多くの児童は話したい意欲や内容があっても、英語で伝えることに困難を感じていることや、児童間の学習定着度に個人差がある中で外国語科の授業が行われていることが分かった。

このような社会的背景や小学校外国語科の現状から、外国語によるコミュニケーションに困難を感じている児童に「自分の気持ちや考えを伝えられた。」と実感してほしいと考え、研究主題を設定した。この研究主題に迫るために、本研究では小学校外国語科における「話すこと」の言語活動に焦点を当てた。そして、児童が目的や相手に応じて学習した表現を用いて自分の気持ちや考えを外国語で伝えることができることを目指す。また、学習定着度の個人差がある中でも、どの教員も児童一人一人に合わせた個に応じた指導ができるよう、研究を進めた。

第2 研究仮説

表現を活用して自分の気持ちや考えを伝え合う学習と、児童の学習状況を踏まえた個に応じた指導を積み重ねることによって、児童が自分の気持ちや考えを、学習した表現を活用して外国語で伝えることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 過去の教員研究生の資料（中学校英語科）を参考に、言語活動における学習の記録、蓄積、活用を生徒が行うことによって、生徒の話す力が伸びることが分かった。そのため、小学校外国語科において、学習の記録、蓄積、活用を児童自身が行える開発物を検討した。
- (2) 国立教育政策研究所の資料を通して、CAN—DOリスト形式による学習到達目標を用いて学習者が自身の学習状況についてチェックすることは、学習者の主体的な学びにつながる

ことが分かった。そのため、本研究では、小学校外国語科において学習者が自身の学習状況をチェックできる指標を作成した。児童の学習状況を四つの段階に分けた指標を設定することで、児童が自身の学習状況を認識しやすいようにした。

2 調査研究

令和5年7月に、都内公立小学校5校の第6学年に在籍する児童413人及び都内公立小学校5校において外国語科を指導した経験のある教員20人を対象に調査研究を実施した。

調査研究の内容は「話すこと」に関する児童の実態や小学校外国語科におけるCAN-DOリスト形式による学習到達目標について調査を行った。

第6学年に実施した調査結果では、「話すことが得意になるためには、どのようなことが必要であると思いますか。」の設問において、「英語で話す前に、英語の表現を音声で確認すること」の項目は、全体の57%の児童が必要であると回答した(図1)。このことから、児童が学習した表現の音声聞いて、活用できる手だてが必要であると考えた。

また、教員対象の調査結果から、CAN-DOリスト形式の学習到達目標を設定しているが、授業ではあまり活用していないことが分かった(図2)。このことから、CAN-DOリスト形式の学習到達目標を授業で活用する指導の工夫が必要であると考えた。

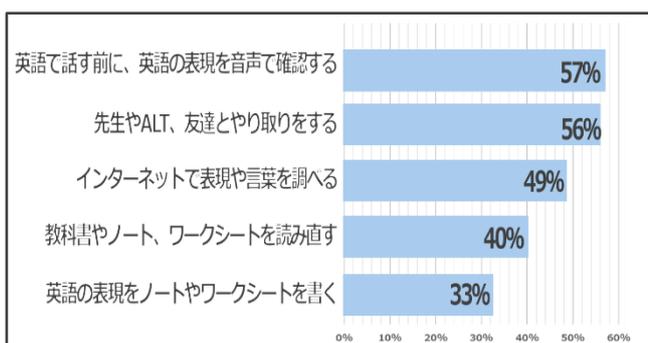


図1 児童への調査結果 (n=413)

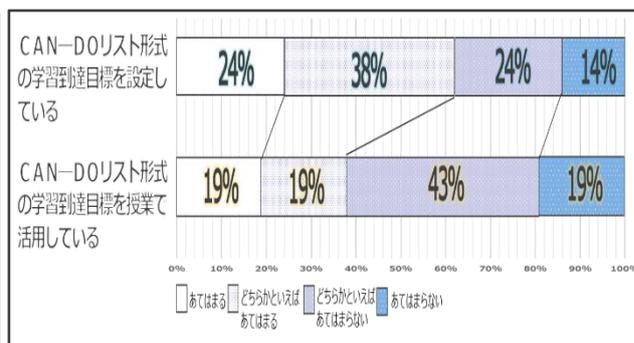


図2 教員への調査結果 (n=20)

3 開発研究

上述した児童の実態や教員が抱える課題を踏まえて、本研究は以下の2点を実践した。

(1) 「学習到達チェックシステム」の開発

教員が児童と学習状況を共有することができるよう、一人1台の学習者用端末を用いた「学習到達チェックシステム」を作成した(図3)。「学習到達チェックシステム」はCAN-DOリスト形式の学習到達目標に指標を加え、児童が学習者用端末を活用して自身の学習状況を記録し、蓄積できるシステムである。この「学習到達チェックシステム」を児童が活用することにより、児童は自身の学習状況を把握することができる。

また、学習した表現の音声や関連するイラストも「学習到達チェックシステム」に記載し、児童自身で学習した表現や内容を確認できるようにした。他にも、児童の学習状況は「学習到達チェックシステム」の一覧に反映され、児童自身で学習状況が分かるようにした。

また、「学習到達チェックシステム」はクラウド上で児童の学習状況を教員と共有することができるようにした(図4)。そうすることで、教員は児童の学習状況を把握することができ、児童一人一人に合わせた個に応じた指導を行うことができると考えた。また、学級全体の学習状況も把握できるため、教員の指導改善にも役立つことができると考えた。

学習した表現を用いて、自分の気持ちや考えを外国語で伝えることができる児童の育成
 一教員が児童と学習状況を共有し、児童の話す力を伸ばす個に応じた指導の工夫—



図3 児童用「学習到達チェックシステム」

出席番号	自分のほしいもの、 なりたいこと、やりたいこと				自分の普段の生活			
	発展	達成	補助	困難	発展	達成	補助	困難
1		○					○	
2		○			○			
3	○					○		
4		○				○		
5		○					○	
6			○			○		
7		○				○		
8		○				○		
9			○				○	

図4 教員用「学習到達チェックシステム」

(2) 「学習到達チェックシステム」を活用した授業モデルの開発

「表現を活用して自分の気持ちや考えを伝え合う学習」と、「児童の学習状況を踏まえた個に応じた指導」を積み重ねていく授業モデルを作成した(図5)。

「表現を活用して自分の気持ちや考えを伝え合う学習」では、コミュニケーションの目的、場面、状況を明確にし、児童は毎回相手を替えてペアトークに取り組み、自分の気持ちや考えを伝える。

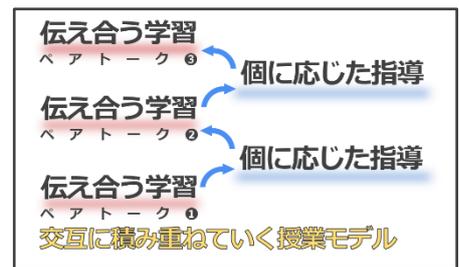


図5 本研究の授業モデル

「児童の学習状況を踏まえた個に応じた指導」では、指導の個別化として、「学習到達チェックシステム」を教員が活用し、児童の学習状況を把握した上で、支援が必要な児童へ重点的に指導を行う。具体的には、学習した表現の活用が困難な児童に対して音声を参考にするよう言葉掛けをしたり、ALTと連携して個別指導を行ったりする。学習の個性化として、「学習到達チェックシステム」を児童が活用して学習した表現の音声を聞いたり、友達同士で表現や伝える内容を話し合ったり、児童が自分に合った学び方を選択できるようにする。

図5のように、「伝え合う学習」「個に応じた指導」を交互に積み重ねることによって、児童は学習した表現を活用して自分の気持ちや考えを伝えた後、「学習到達チェックシステム」を基に自身で学習した表現を確認したり、教員は児童の学習状況を踏まえて指導を行ったりすることで、児童は学習した表現や内容を修正して伝えるようになると考えた。

4 検証授業(令和5年11月~12月実施)

都内公立小学校にて第6学年を対象に外国語科(全7時間扱い)で検証授業を実施した。本単元は、新しいALTにおすすめする給食のメニューなどについて相手に伝わるように自分の気持ちや考えを含めて話すことを目標に行った(表1)。

表1 本研究の授業モデルを取り入れた単元の流れ(全7時間)

第1時	・単元の見通しをもつとともに、新出表現について知る。
第2時	・新出表現を中心とした「聞く」活動及び「話す」活動などを行う。
第3時	・「学習到達チェックシステム」を活用して本研究の授業モデルを行う。
第4時	①伝え合う学習(ペアトーク)(約2分間でペア同士による発表)
第5時	②個に応じた指導(発表を振り返り、表現を音声で確認したり、児童が友達同士で表現や内容について話し合ったりする。)
第6時	・ペアトークでは相手を替えながら、①と②の活動を交互に行う。
第7時	・新しいALTにおすすめする給食のメニューについて、相手に伝わるように自分の気持ちや考えを含めて話す活動を行う。

(1) 外国語科「話すこと」についての児童の意識の変容について

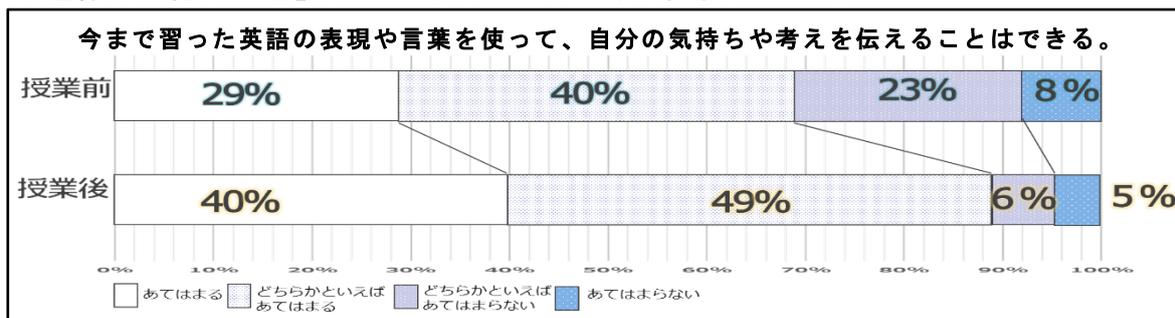


図6 外国語科「話すこと」に関する質問項目の検証授業前後の児童の意識の変容 (n=65)

質問紙調査では、「今まで習った英語の表現や言葉を使って、自分の気持ちや考えを伝えることはできる。」の質問に対して特に否定的な回答をした児童の数値が減少した（図6）。また、児童の振り返りから、「学習到達チェックシステムで前の学習を振り返ることができたので、分かりやすかった。」「ペアトークを通して友達の意見を聞いて、発表を改善できた。」などの記述があった。他にも、抽出児童のインタビューから、「学習到達チェックシステムで自分に合った学び方ができて、使いやすかった。」などの意見も聞かれた。

(2) 児童のスピーチから発話語数の変容について

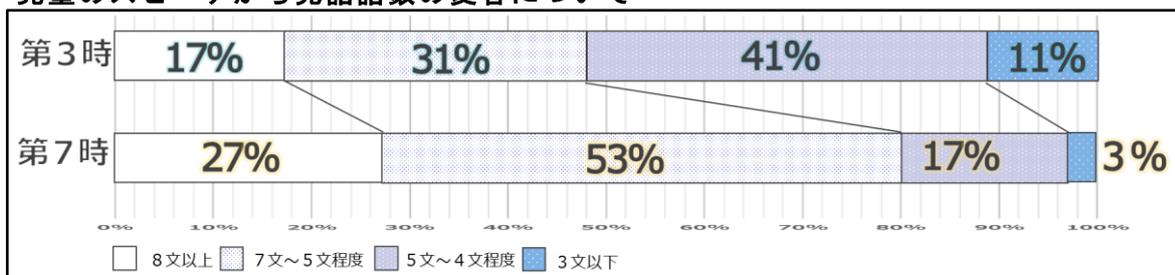


図7 第3時と第7時の児童のスピーチに関する変容 (n=64)

検証授業の第3時と第7時での児童のスピーチを分析し、そのスピーチの文量について調査をした。その結果、第7時では、第3時よりも学習した表現を5文以上活用して表現している児童の割合が増えた。具体的には、スピーチの内容において、「Do you like spicy curry? Do you like cheese curry?」など相手の好みを意識して尋ねたり、「I like」の表現で伝えていた児童が「My favorite school lunch is」と表現を変えて自分の気持ちを伝えようとしたりと、学習した表現を活用して自分の考えを伝えようとしている姿が見られた。これらの結果から、開発物及び本研究の授業モデルについて検証できた。

第4 研究の成果

- ・ 自分の気持ちや考えを伝え合う学習と児童の学習状況を踏まえた個に応じた指導を積み重ねたことで、学習した表現を活用して話す力を伸ばすことにつながった。
- ・ 「学習到達チェックシステム」で児童が自身の学習状況を把握し、学習した表現を自ら確認することで、話すことに苦手意識を抱える児童が自分に合った学び方で学ぶことができた。

第5 今後の課題

- ・ 「学習到達チェックシステム」に記載する内容を精選し、児童が学習した表現をより活用できるよう、改善を図る。
- ・ 話すことが得意な児童に対して、相手や目的を意識した表現を更に工夫する視点や、自身のスピーチを改善する視点を示すことが必要である。